

## 令和元年度教育事業 環境教育学習プログラム開発事業 「子ども環境探検隊・三陸ジオパーク編」

- 1 趣 旨 三陸ジオパークとその周辺の豊かな自然のもと、自然体験活動を通じて、自然の雄大さを感じとり、自然の仕組みについて理解を深めるとともに、その保護や活用について考え、地域に根ざした環境教育の推進を図る。
- 2 主 催 独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立花山青少年自然の家
- 3 共 催 栗駒山麓ジオパーク推進協議会
- 4 後 援 宮城県教育委員会・栗原市教育委員会
- 5 協 力 三陸ジオパーク推進協議会・宮城県志津川自然の家
- 6 事業の概要
  - (1) 期 日 令和元年7月13日（土）～15日（月・祝）〔2泊3日〕
  - (2) 参加者
    - ①参加対象 宮城・岩手県内の小学校4年生から6年生 25名程度
    - ②参加状況 参加総数47名（応募者数 115名）
- 6 場 所 宮城県志津川自然の家 及び 三陸ジオパーク（ジオサイト）  
国立花山青少年自然の家 及び 栗駒山麓ジオパーク（ジオサイト）
- 7 講 師 三陸ジオパーク気仙沼推進協議会運営委員長 豊田 康裕 氏  
富山大学大学院 原田 拓也 氏
- 8 企画・運営のポイント  
「海から山へ」宮城県のジオパークを学びの一環として、「三陸ジオパーク」との連携を図りながら、三陸ジオパークと栗駒山麓ジオパークを巡る探検として企画した。また、志津川自然の家の協力をいただき、海と沢の活動を行うことで、ジオパークでの大地のつながりを学ぶことに加え、水辺の活動にも関心を持たせたいと考えた。

### 9 日 程

		活 動 内 容
7/14（土）	【導入】	・シーカヤックで志津川湾内を巡り、海から美しい島や砂浜を見学しながら、自然の恵みや自然の成り立ちについて考える。
7/15（日）	【展開】	・三陸ジオパーク（気仙沼市）の岩井崎周辺で解説を聞きながら、自然の雄大さや震災の影響について考える。 ・塩づくり体験を行い、自然の恵みについて考える。 ・栗駒山麓ジオパークの伊豆沼で解説を聞きながら自然について学ぶ。 ・岩石の解説を聞きながら、岩石標本をつくる。
7/16（月・祝）	【まとめ】	・沢活動を通して、山と海のつながりを考えながら環境についてまとめる。 ・三陸ジオパークと栗駒山麓ジオパークの学習を振り返り、自然のありがたさや自然の驚異についてまとめる。

### 10 活動の内容について

#### 【7月13日（土）1日目】「志津川自然の家周辺フィールド」



【7月14日（日）2日目】「三陸ジオパーク巡り岩井崎周辺」



【7月15日（月・祝）3日目】「花山自然の家周辺フィールド」



## 11 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足：81% やや満足：19% やや不満：0% 不満：0%

参加者47名に対して行ったアンケートの集計結果は、全員が満足群であった。この事業は総合的にみて非常に好評であったといえる。

### (2) 参加者の声

- ・シーカヤックで、波に乗れたり、舵をとったり、慣れると思いのままに動かすことができた。
- ・塩がどのようにできるか分かった。自分で作ったので愛着がわいた。
- ・いろいろな岩石を見ることができた。それぞれの性質を知ることができたのでまた探したいと思えた。
- ・海岸と川は、石の形や大きさが全然違うし、普段見られないような石や貝もあり、面白かった。
- ・サンクチュアリセンターは、伊豆沼でハスを見たり、いろいろな鳥を見たりすることができて勉強になった。
- ・学校の授業じゃ知らないことを知ることができた。

### (3) 成果

- ・25名の募集に、115名の応募があった。そのうち、地域や学年・男女等を考慮し、48名を選考して実施した。1名が前日のキャンセルだったが、宮城県内の各地域はもとより、岩手県からも参加を得る事ができた。
- ・栗駒山麓ジオパークと共催することにより、参加者にとって、これまで以上にさらに深い学びを提供できる体制ができた。
- ・志津川自然の家の協力のもと、シーカヤック体験を実施した。初めて体験する参加者も多く、アンケートの結果から一番人気のあった活動となった
- ・元栗駒山麓ジオパーク専門員の原田氏に3日間帯同していただいた。南三陸・気仙沼、花山の大地のつくりやそこにある石について説明していただき、参加者の学習を深めることができた。
- ・「三陸ジオパーク」の解説や「塩づくり」について体験を通して学ぶことができた。岩井崎の化石や塩づくりについて歴史や背景を理解した上で、自然の恵みにふれたことは、普段体験できない環境学習プログラムとして有意義だった。
- ・学生ボランティアを班付きカウンセラーにすることによって、ボランティアが主体的に子どもたちの支援に関わることが出来た。

### (4) 課題

- ・参加申込が多かったため、今年度も参加者を48名まで増やしたが、活動の充実の面から参加人数の精選について検討が必要である。

担当：企画指導専門職 安達 章美